
とある科学の機械人形（マーシナリー）

和三盆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の機械人形^{マシーンナリー}

【Nコード】

N7514H

【作者名】

和三盆

【あらすじ】

学園都市のちよつとした噂、^{マシーンナリー}『機械人形』。そいつはふらつと現れて、何も言わずに暴れてどこかへ消える。そのロボットのようない行動と雰囲気から『機械人形』の名がつけたいらしい。今回は、ファンフィクションとはいえないものを書いてしまったので、今回はファンフィクションとなるよう頑張ります。テーマは、ちゃんと原作のキャラクターを登場させる。チャレンジは、ストーリーの主要な所には原作のキャラクターに影響させない。です。それでもいいと言う人は是非読んでください。

「学園都市のちよつとした噂（前書き）」

「こつしたほづがいい」「ここはおかしい」というアドバイス、少々きつくてもいいのでお待ちしております。

一、学園都市のちよつとした噂

ここは『学園都市』がくえんとし。東京西部に位置する完全独立教育機関かんぜんどくりつきょういくきかん。その広さは東京都の三分の一を占め、外周は高い塀に囲まれている。何百もの小中高校、大学がひしめき合い、その総人口 二百三十万人の約八割が学生の『学校の街』。

それだけでも十分変わったところだが、もっとも特徴的なのは、その学園都市に住む生徒達には、『超能力』カリキュラムを発現はつげんさせるための特別な授業カリキュラムが組まれていることだ。これによって学園都市の生徒は大小さまざまな能力に目覚める。能力の大きさの幅はスプーンも曲げられない『レベル0』から、一人で軍隊とも対等に戦える『レベル5』までである。

そんな超能力さえも科学で説明された、科学の象徴 学園都市。その中で中高生が中心に住む学区、第七学区。最近、ここではある噂がたっていた。

二、とある少年の回想

今日は七月十九日、明日から夏休みである。

「では、これで終業式を終わります。生徒のみなさんは教室に帰って、先生がくるまで席に座って待っていてください」

生徒会長が終業式の終了を宣言すると、体育館はそれまで黙っていた生徒達の話し声で一気ににぎやかになった。

先生が

「喋らずに並んで教室に帰れ」

とか言ってるが、素直にそんな言葉を聞く連中ではない。みな思いいに誰かと喋りながら、駅前並みにごった返した通路を歩いている。和井内春人も、そんな風にクラスメイトと喋りながら教室へ向かっている一人だった。その和井内春人の耳に、とある噂話が聞こえてきた。

「カミヤん、知ってるかにやー、例の噂。また出たらしいぜい」

と独特の訛りの猫ボイスが聞こえてくる。おそらく、和井内の隣のクラスの土御門元春のものだ。短い金髪をつんつんに尖らせ、薄い青のサングラスをかけている。彼がシスコン軍曹であることは噂どころか、もはや周知の事実である。

「『機械人形』のことか？それならおれも聞いたぞ。昨日、路地裏で三人くらいの不良がやられたって」

この声は、土御門と同じく隣のクラスの上条当麻のものだ。この男、恐るべきもので、カミジョー属性なるもので、数多くの女子にフラグなるものを立てまくり、しかも本人は無自覚と言う天然の女たらしなのだ。その威力は和井内も知っていて、上条当麻の行くところ美少女あり（何らかの問題もあり）と知らしめた。

そのうち、こいつの上から女の子でも降ってくるんじゃないかと和井内は思っている。

「『機械人形』かー。カエルのゲコ太のマスクで顔を隠すなんてもしかすると、女の子かと思っただんやけどカミヤんが反応しないということはどうやらその線はなさそうやねー」

前に言った二人と同じクラスの青髪ピアスの声が聞こえてくる。

こいつはあだ名通りの容姿と180センチを越す身長をもつ体力馬鹿のくせに豊富なオタク知識をもつ、まさしく文武両道な男である。ちなみに関西弁を喋っているが嘘である。

「お前な、万が一『機械人形』の正体が女だとして、不良を一人で三人も張り倒す女のどこがいいんだよ」

「わかってないなーカミヤん。覆面武道家少女、いいやないの。そういう子に限って素顔はすごく可愛い…って、可愛かったらカミヤんにもってかれてまうやないの！おのれ、カミジョー属性。ボクみたいな男はどないすりゃあええんや…」

「人を疫病神みたいに言うな！」

「三バカの話し声が遠ざかっていく。」

「『機械人形』かー。たまに噂聞くなー」

どうやら、一緒に話していたクラスメイトも聞いていたようで、話の話題を変えてきた。

「いや…俺は…あまり…興味ない」

クラスメイトの話に和井内はいつも通りの口調で答える。和井内は基本的に無口だ。たまに喋ることはあっても、その口調はとてもゆっくりなのだ。

「またかー。お前、万物に対する関心が薄いよなー」

和井内はクラスメイトのその言葉を否定しない。それは紛れもない事実だからだ。

（そう…俺は…感情が…とても薄…い）

和井内は自らの過去を回想する。

突然、ソレは俺の内側に現れた。多分、小学校四年生のころ。小

学校からの帰り道、通学路の隅に子犬が捨てられていた。そこには同級生たちが男女ともに数人集まっていた。彼らは口々に『かわいー』だの『すげー』だの言っていた。俺もその話の輪の中に入って行ったが、しばらくして一人の同級生が

「やべ、もう塾の時間だ」

とか言っただけで帰って行った。それを皮切りに、同級生たちは

「あー！『マジカルバワード超機動少女カナミン』の時間だ！」

「俺も見に帰らないと…」

「お前、男のくせにあんなの見てんの？」

「うるさいっ！」

とか言いながら帰ろうとする。

俺は当然のことと思っただけで聞いた。

「誰かこいつ連れて帰らないのか？」

すると、同級生たちは走りながら

「犬の世話とかできないし」

「親が動物嫌いだし」

「急がないと、アニメが始まっちゃう！」

とか言っただけで帰って行った。

「くっ…」

一人取り残された俺に子犬が慰めるようにすり寄ってきた。

俺は子犬を抱き上げて言った。

「生命って…不平等だ…な」

そのときだと思っただけでソレが俺の内側に現れたのは。それが現れて以来、俺は物事への関心が薄くなった。人が語る理想論りそうろんも現実論げんじつろんもとても空虚なものに思えた。それと比例して俺の感情も薄くなっていた。

ちなみに子犬は、犬を飼いたがっていたご近所さんがいたので飼ってもらいました。

小学校六年生の時、いきなり父さんの海外への転勤が決まった。まだ、子供だった俺を海外へ連れて行くのは心配だったのか、両親は

俺に『学園都市』がくえんとしに進学することを進めてきた。もうその頃には、『不安』の感情も薄まっていたし、学園都市は基本的に全寮制だから、子供が一人暮らしできるように環境が整備されているから問題ないと思い、俺は両親の提案に乗った。そして、俺は中学校からこの学園都市に住むことになった。今現在、俺は高校一年生になり夏休みを迎えている。

「おーい」

何の反応もない和井内に、クラスメイトが声をかけてきた。

和井内は薄く慌てて意識を内側から外側へと移す。

「すまん…考え事を…して…た」

そう言って和井内はクラスメイトとともに体育館から出て行った。

三、とある少女の回想

「では、これで終業式を終わります。生徒のみなさんは教室に戻って、先生がくるまで席に座って待っていてください」

とある高校の生徒会長、百地千風ももぢ ちかぜはそう言つて、一学期の終業式の終わりを宣言した。

生徒達が一気に立ち上がり話しながら体育館を出ようとする。先生が静かに移動するよう注意するが、話し声は消えはしない。

生徒の話の中から千風ちかぜの気になる噂が聞こえてきた。

「カミヤん、知ってるかにやー、例の噂。また出たらしいぜい」

「『機械人形』のことか？それならおれも聞いたぞ。昨日、路地裏で三人くらの不良がやられたつて」

「『機械人形』かー。カエルのゲコ太のマスクで顔を隠すなんてもしかすると、女の子かと思つたんやけどカミヤんが反応しないということはどうやらその線はなさそうやねー」

「ここ最近、この学校のある第七学区で話題のほに上つている噂とは『機械人形』のことだ。『機械人形』とは最近女子の間で話題になっているゲコ太というカエルのキャラクター、そのマスクを被つた不審者のことだ。名前の由来は、ふらりと現れ、一言もしゃべらずに暴れまわり、すぐにどこかに消えるそのロボットのような行動と人間離れた強さから、『機械人形』といつからかわられるようになったらしい。」

その出没頻度は稀まれ、出没場所は主に路地裏、出没目的は謎という三拍子びょうしそろつた怪しさなのだが、大騒ぎになつたことはない。なぜなら、被害者の不良、いわゆるレベル0の集団のスキルアウトはみな軽傷で、かつあげされているところを助けられたという目撃者もいるので、みな『機械人形』のことを怖がつているというよりも面白半分はんぶんで噂しているようだ。

千風も『機械人形』の噂が気になる一人だが、その理由は面白半分

ではない。

千風ちかぜは約一年前のことを思い出す。

「姉ちゃん、ちよつと遊ばねえ？というか強制連行？」

暗い路地裏のなか、そんなガラの悪い男のふざけた声が聞こえる。私はいわゆるナンパをされていた。

（高校生になったからって、夜遅くまでで歩くんじゃなかった…）

そのころ、私は高校に入ったばかりで浮かれていた。だから少し遅くまで町を歩いていたら、数人の不良に声をかけられて路地裏に引き込まれてしまった。

（どうしよう…）

私には実家が道場をやってるおかげで剣術けんじゆつの心得こころえがあつたが、そのとき近くに棒はなかつた。もしあつたとしても、不良は五人いたから、よほどの手練てだれでもない限り、勝てはしない。

学園都市に入つて手に入った『風力使い（エアロシューター）』の能力もレベル2で、団扇うちわの風ぐらいしか役に立たないものだった。

そんなわけで絶体絶命ぜったいぜつめいだったのだが誰も助けてくれない。路地裏と言つても大通りから見えるところについて、何人かと目があつたが、見て見ぬふりをされた。軽く自分の人生と人類に絶望していた時だった。

「な、なんだお前…」

いつの間にか、近くに不良以外の誰かが立っていた。

（ゲコ太…？）

カエルのゲコ太のマスクを被った何者かが何もしゃべらずにそこに立っていた。どうやら、ゲコ太のヒゲの部分の生地が薄くなっているようで、そこから周りの様子を見ているようだが、何を考えられているか分からなかつた。まるで、無機質むきしつなロボットのようにただ立っているかのように思えた。

「何か喋れよ、コラ」

そういつて不良はその謎のゲコ太マスクに殴りかかって言ったが、ゲコ太マスクは最小限の動きで拳を避けて、突き出された不良の腕の肩を触った。

ポキ、とわずかにそんな音が聞こえた気がした。すると、ゲコ太マスクに殴りかかった不良は

「がああああああああ！肩がああああああああああ！」

と言つて肩を抑えて崩れ落ちた。

「な、てめえ何した！」

そういつて不良たちは一斉にゲコ太マスクに襲いかかった。中にはスタンガンやナイフを取り出したものもいた。

しかし、ゲコ太マスクは取り出された凶器に恐怖している様子ではなかった。まるで『恐怖』という感情がないかのようなだった。

不良達はゲコ太マスクを囲んで四方から襲ってきた。ゲコ太マスクはしゃがんで不良達の拳やナイフを避けると同時に両手で二人の不良の膝を触った。

ポキポキ、

「ぎゃあああああああああ！」

「ああああああああああ！」

二つの細い小枝が折れるような音と不良の絶叫の合唱が聞こえた。

「くそがつ！」

そういつて、残った不良の一人がナイフを突き立てようと、しゃがんだゲコ太マスクの背中に向かって振りおろしたが、

コキ、

「うああああああああ！」

信じられない速さで振り向いたゲコ太マスクにナイフをもっていた手首を握られ、不良はナイフを落としてそこに倒れ伏せた。

ゲコ太マスクはもう一人の不良へゆつくりと振り向いた。

「く、来るなっつ！」

そういつて、不良は拳銃を取り出した。

(は？ピストル。いやいや、なんでそんなの持つてるの?)

そう思う私の心の声は不良には届かない。

明らかに不良は恐怖のあまりに混乱している。これでは、いつ発砲してもおかしくない。

ドパン！！

（あ、発砲した）

私は人が死ぬところを目の前で見えてしまっかと思っただ。しかし、銃弾はゲコ太マスクには当たらなかった。

「なんで当たんねんだよおお！！」

ドパン！ドパン！ドパン！ドパン！！

不良は錯乱して拳銃を乱射した。しかし、ゲコ太マスクには当たらない。全く無駄のない無機質な動きで銃弾を避ける。ゲコ太マスクは銃口の向きからどこに銃弾が飛ぶか予測しているようだった。

ドパン！

不良が完全に見当違いの方向に発砲した。その先にいたのは…

（私？）

銃弾が私の眉間に迫る。私は何が起こったのかもわからなかった。次の瞬間私の視界は真っ黒になった。

私はしばらく思考停止していた。

（私、生きてる？）

視界に光が戻る。

不良の顔が恐怖の色一色に染まっている。

ゲコ太マスクは何かを握っている。

私の眉間には少しも血は出てなかった。

ゲコ太マスクが握っていた手を離れた。その掌から出てきたのは銃弾。私はそれで状況を理解した。不良の銃弾が私の眉間に当たる直前、ゲコ太マスクは掌で銃弾から私を守ったのだ。私の視界が真っ黒になったのは、目の前をゲコ太マスクの手があつて視界が遮られていたからだろう。

もちろん、掌で銃弾を受け止めるなんて普通の人間ならできない。

おそらく、何かの『能力』を使ったのだろう。
ゲコ太マスクは不良のほうに歩きながら、銃弾を受けた手をぶらぶらさせている。痛かったのだろうか？

不良のほうは拳銃が弾切れのようであた立ち尽くしている。
ゲコ太マスクが不良の目の前にまでたどり着くと、不良は怯えた吐息を漏らしながらゲコ太マスクを見た。ゲコ太マスクはそんな不良を安心させるかのように不良の両肩に手を置いた。

パキパキ、

夜の路地裏に声にならない不良の悲鳴が鳴り響いた。

不良全員を倒した後、ゲコ太マスクは私のほうに振り向いた。そして、そのまま近づいてきた。

おそらく、襲われていた私の安否を確かめるためだったのだろうけど、五人の不良を一人で倒し、なおかつ弾丸を掌で受け止めた怪物に私は恐怖を抱いてしまっていた。

「こ、来ないで……」

私の口からそんな言葉が出た。すると、ゲコ太マスクはすぐに立ち止まり、少しの間そのまま立ち続けていたが、しばらくしてものすごいスピードで路地裏の奥に走って行った。

ゲコ太マスクの姿が消えた後、私はすぐに後悔した。

（わ、私、いまさっきなんて言った？ 恩人に、来ないでって……）

しばらくして発砲の音を聞いて駆けつけた警備員が言うには私は『被害者』らしいけど、私は明らかに『加害者』でもあった。

これは私の力の無さが招いたこと。そう思い、私は血のにじむような努力をこの一年間続けてきた。そして、ついにレベル4までたどり着いた。生徒会長にもなったし風紀委員にもなった。あとは彼（彼女？）に再会して、あの時のお礼と謝罪を言うだけだったのだ。
だが。

どうやら彼は『機械人形』と呼ばれていることは突き止めたが、出

没頻度が稀まれで出没場所も路地裏だから、足取りがつかめない。更に悪いことに、最近彼に関する『妙な噂』があつて…

「会長！」

千風は急に生徒会の書記に話しかけられた。

「む…いきなりなんだ？」

千風は思考を止め、書記のほうを向く。

「どうしたんですか？考え込んで…」

「いや、機械人形のことだな」

「確かに近ごろ、ひそかに噂されてますね。そう言えば、近ごろ増えてきた『レベル0狩り』、機械人形も絡んでいるって、もっぱらの噂ですが…」

「そんなはずはない！機械人形がそんな奴であるわけない！」

「はあ…。確かに会長は風紀委員としてレベル0狩りをかなり捕まえてますけど…」

「もう四人捕まえた。この調子でレベル0狩りを減らしていけば、そんな噂も消えるはずだ」

そう言つて千風は話を打ち切つた。

（確かに、今まで機械人形が襲つていたのはみなスキルアウト、つまりレベル0だが、それはやつらが悪さをしていたからだ。それに機械人形は標的を過度に傷つけない。近ごろの『レベル0狩り』のようなひどいことはしないはずだ）

そう確信しながらも、千風は胸に一抹の不安を抱えていた。千風は機械人形が実際どんな奴かは知らない。千風と機械人形の接点は一度助けた、助けられただけで、人物像は千風が集めた情報からなる所詮推測である。

千風はその推測による不安定な確信にすぎり、胸の不安を排除して自らの教室に向かつた。

そのころはまだ『能力』も弱かったから俺は対抗する術すべをもつてなかった。

俺は脅されて殴られて、結局クス達に金を払うことになった。悔しかった。自分にこいつらを駆逐する力が欲しかった。そんなときにあいつはあらわれた。

『マーシナリー機械人形』

やつは一瞬でクス達を地面にひざまずかせ、やつらが奪った俺の金を取り返してくれた。俺も奴みたいに強くなりたいと本気で思った。

そして今、俺は強くなった。

『マーシナリー機械人形』、いまなら俺はお前の横に並べる！

いまならお前とともに戦える！

だから、来てくれ、俺のもとに！

ともにクスを駆逐しよう！

『誰か』は表面には出さず、心の中だけでそう思いながら、どこかに意識が飛んでるクラスメイトに声をかけて体育館を後にした。

五、とあるクラスのホームルーム

終業式が終わり、和井内春人は自分の教室に戻っていた。現在、担任が黒板の前に立ち、一学期最後のホームルームをしている。

「近頃、レベル0狩りやら機械人形やら物騒だからお前達、気をつけるじゃんよー。まあ、ウチのクラスは馬鹿みたいに優等生ばかりだからそんな心配は必要ないか。お前達、少しはハメを外すじゃんよー」

そんな警告だか許可だかよくわからないセリフを吐いているのはこのクラスの担任、黄泉川愛穂。体育教師ゆえに年中緑色のジャージを着ているが、それがもつたいたいほどの美貌とスタイルをもつ。しかし、彼女本人は自らが放つ大人の色香に気づいていないという始末。あらゆる意味で、もつたいたい人である。

「もしお前達がハメを外しすぎて何か問題が起きても、ウチが懲らしめてあげるから安心するじゃんよー」

全く安心できない話だが、彼女は教師であるとともに警備員でもある。警備員とは百地千風などの風紀委員と同じく、学園都市の治安維持機関である。風紀委員は能力者である生徒で構成され、警備員の構成員である教師は能力者ではないが専用装備で固めている。

黄泉川にはたとえ相手がレベル4の能力者であろうと、決して子供には武器を向けないという信念があり、彼女はその信念のもとに暴走能力者を武器の代わりに盾やヘルメットなどの防具で叩きのめす、とても子供思いの先生。かもしれない。

「とりあえず、ホームルームはこれで終わりじゃん。せつかくの夏休みだから、みんな適度にハメを外して青春を楽しむじゃんよ。勉強ばかりするんじゃないぞ」

黄泉川の話が終わると、日直が号令をして、一学期最後のホームルームは終わった。

みんなそれぞれの友達と『宿題どう?』『いやまだ全然』などと

話しながら教室を出ていく。

隣のクラスはまだホームルームをしているようで、にぎやかな声が聞こえてくる。

「上条ちゃん、いくら夏休みだからって女の子に手を出しすぎては駄目ですよ」

隣のクラスの担任、学園都市の七不思議、身長一三五センチの小學生サイズの先生、月詠小萌つぐよみこもえの声が聞こえてきた。

「小萌先生…俺、いったいどんな評価を受けてんですか…」

ラブコメの主人公、上条当麻かみじまよしまの声がする。『そういう…評価…だと和井内わいないは心の中で答えておいた。あまり興味はないが。

そして、和井内は教室を出て行った。

六、とある少年の帰り道（前書き）

サル並（I・Q・80）となっているところは目をつぶってください。

六、とある少年の帰り道

七月十九日。明日から夏休みである。空はすでに黒く染まり、天然の月の明かりと人口の電気の光が街を照らしている。

そんな夜の街を和井内春人は散歩していた。いつもなら、和井内は学校が終わるとまっすぐに家に帰るのだが、明日から夏休みということもあって、彼にしては珍しく気分がハイになっていた。といっても、少し寄り道してみようというだけで、一般に言うハイな気分とはほど遠いものだったが。

(懐かしい…な)

和井内のいるここは和井内は普段あまり来ない場所だ。

和井内は久しぶりに来た周辺の景色を見て思う。

(少し…変わった…な)

長い間行っていないかったところに行くと、あたりの建物が改築や新築されていたりして、風景が様変わりしていることはよくある。

和井内は変わってしまった町の景色に薄い興奮と名残惜しさを感じていた。

「おるあ！！ちくしょうこのクソガキ止まれやこの逃げ足王！！」

「うるっせえ！ぶん殴られねえだけ感謝しやがれサル並（I・Q・

80）野郎！」

結構近くから不良の罵声と聞き覚えのある声が聞こえてきた。声が聞こえてきたほうを見ると、上条当麻が何人かの不良に追われている。

(相変わらず…トラブルに…巻き込まれているな)

同級生が逃げ回る姿を見ても、和井内は心配しなかった。なぜなら、上条当麻の持久力は体育の授業で知っていたし、上条にとつてはこれくらい日常茶飯事だ。なんやかんやで、どうにかなるんだろう、と和井内は思った。

和井内が自らの関心を上条から街の風景に移そうとしたとき

「だつせえ、へばつてやんの〜」

人を思いつきり馬鹿にした声が聞こえた。

どうやら和井内に向けられたものではないようだが、和井内はそちらに視線を移した。

「体力しか能がないくせに、それすらも貧弱じゃあ救いがないな」

さつきとはまた別の声が聞こえた。どうやら、二人組の少年が上条当麻との鬼ごっこに脱落した三人の不良をからかっているようだ。

「ああ！！なんつった今！！」

不良が怒り狂って叫ぶ。なかなかの迫力だが、二人組の少年たちは少しも怖気づかずに

「能なしって言ったんだよ。能なし」

「能なしの上に聴力ちゅうりきもないんだね〜」

堂々と挑発する。

「ブッコロス！！！！」

不良三人は口をそろえてそう言うと、少年二人組は路地裏の中に逃げていく。まるで誘い込むかのように…。

不良達は少年達を追って、路地裏に入って行った。

（『レベル0狩り』…か）

和井内は『直感的に』そう思った。少年たち二人は能力のレベルが高そうだった。対して、不良達は明らかにレベルが低そうだった。これは少し考えるだけでレベル0狩りだとわかる。

「……………」

和井内は少しの間、何かを考えた後、その場から遠くへ歩いて行った。

七、とある少女の不安

とある高校の生徒会長 兼 ジャッジメント 風紀委員である百地千風は七月十九日の夜、風が吹く路地裏を、とどころ破れたジーパンに髑髏のTシャツという不良のような服装で歩きまわっていた。

最近、百地千風は夜に一人で出歩くことが多かった。おもに路地裏のような人目に付かないところでうろろうしていた。

理由は二つ。一つは『レベル0狩り』を狩るため。

『レベル0狩り』などの犯罪はひっそりと、誰が犯人かわからないように行われる。だからそれがおこなわれる時間や場所も、目立たない夜や路地裏で行われる。よって、千風は自分を囿にして『レベル0狩り』を誘い出しているのだ。

二つ目の理由は

（機械人形…）

近ごろ、話題に上りだしているあるうわさのことを千風は思い浮かべる。その存在は二、三年前から噂されていたが、注目され出したのはつい最近だ。それまでは、たまに昼食の時間に『こういう奴がいるらしいよ』『へえ、変な奴がいるんだね』ぐらいにしか噂されてなかった。そんな噂がなぜ今頃になって言いふらされているのかと言うと、『機械人形』が、これまた最近噂され出した『レベル0狩り』を行っているというのだ。二つの噂は相乗効果を生み出して、どんどん広まっていった。

かつて機械人形に助けられた千風としては、そんな噂が広まること自体が不満だった。しかし、千風は機械人形のことをよく知っているわけではない。だから、噂が真実ではないと断定もできなかった。

噂を否定するには事実が必要、そう判断した千風は機械人形の出現する路地裏で情報を集めることにしたのだ。

千風がしばらく路地裏を歩いていると、後ろから微かな物音がした気がした。千風が振り向くと誰もいない。千風は風の音かと思い、前に向き直ってまた歩き始めた。様なふりをして服の中に隠していた木刀を振り向きざまに横一直線に振るう。

「わ……」

木刀には何の手ごたえもなかったが、誰もいないはずの空間から確かに人の声があった。

いる。間違いなくいる。

(『トリックアート 偏光能力』か？自分の姿を消すことができることからレベルは3以上……)

千風はそのままの木刀を振りまわしてみたが、何にも当たらない。(逃げたか……?)

そう思った千風だったが、そんな甘えた考えは排除した。まだ近くで攻撃の機会チャンスをうかがっているかもしれない。油断してはいけない。

千風は木刀を構えなおす。裏路地にかすかな風が吹く。その瞬間、千風は真横へ木刀を突き出した。

「がっ!?!」

さつきより大きな声が聞こえた。

何も無い空間で木刀は確かに何かに当たった。

(手ごたえあり!)

千風は木刀に力を込めて、手ごたえがあった空間に向けて木刀を突いて、縦横無尽じゅうおうむじんとんに振りまわし、薙ぎ払った。

「が!?!ぎゃ!?!ぐああああ!?!」

手ごたえがある度たびに男のうめき声が聞こえた。自らの姿を消している何者かは『能力』を使うための『えんざぎめうりよく 演算能力』に余裕がなくなつたのか、少しづつ姿が見えるようになっていく。

「くらえ!?!」

千風は木刀を振り上げる。高く持ち上げられた木刀は強靱きょうじんな風を纏まとう。そのまま渾身こんしんの力を込めて、千風は風を纏った木刀を縦一文字たていちもんじ

に振りおろした。

「があああああ！！！！」

完全に姿を現した謎の男は風に吹っ飛ばされ、背中から壁にぶつかり気を失った。

「あ…ここは…」

七月十九日の路地裏、ついさっき千風を襲い返り討ちになった男が目を覚ました。

「気がついたか…」

千風が男が目を覚ますまで待っていたのは、この男からいろいろ聞き出したかったからだ。

男が気を失っている間に男の手を後ろにまわして手錠をかけ、更に体を縄で縛って動きを封じておいたから逃げられる心配はない。

男は何とか逃げようと策を巡らしているようだったが、

「私は風紀委員だ。もう警備員アンチスキルに連絡はしている。無駄な抵抗はやめといたほうがいい」と千風は忠告する。

と千風は忠告する。

男は自分が逃げられないのを理解して、ため息をつく。

「ちくしょう、ついてないぜ…。なあ、アンタ、どうして完璧に透明になった俺の居場所がわかったんだ？」

「心配だ」

男の質問に、千風は適当に答えた。

種明かしをすると、千風は能力を使って男の居場所を突き止めたのである。まず、千風の能力はレベル4の『風力使い（エアロシューター）』である。そして、路地裏には風が吹いていた。実は、その風は自然風ではなく、と風の能力によって生み出された『風』だった。千風は自分の生み出した風の流れの揺らぎから周囲の状況を把握していたのだ。

よって千風には死角も無いし、光を屈折させて姿を見えなくしたくらいでは千風は標的を見失うことはないのである。まあ、視覚で

は男の姿を確認することはできなかったから、そういう意味では見失っていたのだが。

しかし、そんなことをわざわざ話してやるつもりのない千風は、さっさと尋問に移る。

「さて、お前は最近増えている『レベル0狩り』で間違いないな？」

「ああ…、こんな遅い時間にこんな場所にいるから、どうせレベル0だろうと思つたら…。能力者の上に風紀委員ジャッジメントなんだもんなあ、ついでねえ」

男はわりと素直に答えた。

「…で、ここからが本題だが、お前たちの『組織』のトップは誰だ？」
「……………組織？」

男はとぼけたが、その仕草の微妙な変化から、千風は男が何かを知っていることが分かった。

千風の言つた『組織』とは、最近、千風が捕まえた『レベル0狩り』から聞き出した、『レベル0狩り』達の集団のことだ。

『組織』といつてもそこまで大げさなものではない。構成員もそんなにいないようで、『組織』の名もまだ決まっていないうだ。『組織』の目的は『無能力者の討伐』なんてもので、千風から見ると少し能力を手に入れた子供が調子に乗っているようにしか思えない。

千風も子供ではあるが。

「知らねえな、そんなの。俺が好き勝手しただけだつつの」

男は最後まで白を切るつもりのようなうだ。おそらく『組織』を裏切つた場合、ペナルティを課せられるのだろう。だから、情けとして一応、千風は男に言っておいた。

「弱みでも握られているなら助けてやるぞ？」

「は？」

どつやら、話すつもりは本当にないようなので、千風は強硬手段に出ることにした。

男にどんなペナルティが課せられるかは知らないが、これくらいで喋るくらいなら大したことないものだろうと千風は判断した。

「ここは、人目に付かないな…」

「え？」

「情報を絞り出すにはちょうどいい場所だ…」

千風がそう言うと、千風の周りの空気、いや風の様子が変わった。微かなものから明確なものへと、小さなものから強大なものへと。音もなく流れていた空気は、今にも男を食い殺そうと唸りを上げる獣に変わっていた。

絶え間ない唸り声の中、千風はあえて感情を込めずに言った。

「本当に話す気はないんだな？」

その声は下手な感情を入れてないゆえに、少女の傍らで唸り続ける獣は単なる脅しではないことを男に理解させた。

「…言います」

男は千風にすべてを話した。

男の話から分かったことは

組織に入ると、狩りの間のアリバイを作ってくれたり、狩りの穴場を教えてくれたり、レベル0狩りをする上でいろいろとメリットがあるということ。

組織には規律はなく、それぞれ思い思いにレベル0を狩っていること。

男は単なる憂さ晴らしでレベル0を襲っていたということ。

リーダーの能力であろう『念話能力』で組織の構成員は連絡を行っているということ。

だから、男は組織のリーダーについては何も知らないということ。

男は嘘は言っていない。男の目に嘘の色が混ざったら、千風は暴風をちらつかせて真実を言うように要求したからだ。

「ハア…」

千風はため息をつく。

どれも前に捕まえた数人の『レベル0狩り』から聞いた覚えのある情報ばかりだ。

「どうやら、組織のリーダーは高レベルの能力者らしく、捕まえた『レベル0狩り』の心を『読心能力者』に読ませても、そこから尻尾をつかめなかった。多分、今回も同じだろう。」

千風は最後の質問に移る。

「機械人形について何か知らないか？」

千風はこの質問だけでもいいから、前回捕まえた『レベル0狩り』の情報とは違う内容の話が聞きたかった。聞いて不安をぬぐい去りたかった。しかし聞こえてきたのは、

「機械人形？リーダーが言うには、『ヤツ』は俺達の仲間らしいぜ。前回と同じ内容の話だった。男の目に嘘の色はない。」

「どうやら、最近捕まえた『レベル0狩り』達の話によると、機械人形は奴らの仲間らしい。」

千風の胸の不安がさらに濃い色になる。

（機械人形…本当にレベル0狩りをしているのか？）

遠くから複数の足音と叫び声がしてくる。

「おるあー！ちくしょうこのクソガキ止まれやこの逃げ足王ー！」

「うるっせえー！ぶん殴られねえだけ感謝しやがれサル並（I・Q・

80）野郎ー！」

「どうやら、トラブルのようだが、この『レベル0狩り』の男を放っておくわけにもいかないので、連絡した警備員が来るまで待つことにする。」

（機械人形…）

千風は自らの恩人のことを考える。

その姿が周りにはどう映ったのか、『レベル0狩り』の男が『なあ、アンタ大丈夫か？』と心配してきた。

八、レベル0を狩る者を狩る者

恒藤周防と黛八八は二人組の『レベル0狩り』である。

七月十九日、その夜に二人は適当に獲物探しをしていた。

どこかの誰かを不良軍団が追いかけてまわっていて、何人かが追いかけてここから脱落していったので、三人くらい挑発してみたら予想通り乗ってくれて、人目のつかない路地裏まで追いかけてきてくれた。

しかし、二人に予想外のことが起きた。不良達はレベル0だろうと思ったが、なんと能力を使ってきたのだ。といってもその能力もレベル2ぐらいの貧弱なものだったので叩き潰しておいたが。

路地裏の地面に倒れて動かない不良三人を恒藤と黛の二人が見下ろしている。

「びつくりしたね〜」

妙に語尾の抑揚が上下する口調は黛八八のものだ。

おそらく黛が言っているのは、不良達が能力を使ったことだろう。

「ああ、そうだな」

恒藤周防が適当に答える。

「やっぱりあの噂、本当なのかもね〜。」

『幻想御手』のうわさ〜」

黛の言葉に、恒藤はため息をついて呆れる。

(またコイツは変な噂を…)

いいかげん、恒藤は黛の噂好きには付き合い切れなかった。

『幻想御手』

それは、最近『機械人形』と同じくらい話題になっている噂で、なんでもそれを使うと簡単に能力のレベルが上がるといふのだ。

機械人形のほうは二人の属している組織のリーダーによると本当にいるらしいが、『幻想御手』のほうは絶対ブラフだと恒藤は思う。学園都市の目的は、SYSTEM、神ならぬ身にて天上の意思に

辿り着くものである。

つまり、超能力を開発して人間以上の存在に進化して世界の真理を知る、というものだ。

それが目的なのだから、もし『レベルアップ幻想御手』が存在して、それが使うだけで能力のレベルが上がるといふものなら実際にカリキュラム授業で使われてなければおかしいのだ。

だから、恒藤はそんな噂に振りまわされる悪友が馬鹿らしくて仕方なかった。

「…そんなこと思わなくてもいいじゃん」

黛は恒藤の心をのぞいて、そう反論した。

黛は『サイコメトラー読心能力者』だ。ちよつとした『テレパス念話能力』も備えていて、近くにいるなら口を使わずに会話できる。

狩りの時は、この能力を使って獲物達の小細工を見破り、恒藤に伝えるなどの恒藤のサポートをしている。今使っていないのは、単に黛が疲れるからだ。

「人生、夢を見ないと。せつかく『超能力』とか手に入れたんだしさ。それに、夢のない男は…」

(女の子にき・ら・わ・れ・ちゃ・う・ぞ)

頭の中に直接話してきた。

「…あんまりふざけていると、ウエルダンのステーキにするぞ」

恒藤は『バイロキネシスト発火能力者』だ。倒れている不良達も全てやけどを負っている。

二人は数多くの獲物を共に狩ってきた。

二人で組めば、どんな相手にも勝てると思っていた。

しかし、その自信にひびを入れるような静かな足音が響いてきた。二人が足音が聞こえてきたほうを振り向くと、そこにはカエルのゲコ太のマスクを被った何者がいた。マシーンナリー機械人形だ。

二人は目の前に噂のマシーンナリー機械人形が現れてもそこまで慌てなかった。

彼らの組織のリーダーから、『マシーンナリー機械人形』は仲間だ、という話を聞いていたからだ。

「よ、よう、マシーナリー機械人形。狩りに来たのか？ だけど獲物は俺達でもう狩っちまったぜ」

「……………」
恒藤が話しかけても、マシーナリー機械人形は無言で恒藤と黛に近づいてくる。そこからは、何の感情も感じ取れなかったが、二人は本能的に自分達の危機を感じた。

「…！ 黛！」

「うん！」

二人はりんせんたいせい臨戦態勢をとった。

『テレパス念話能力』で相談する。

(黛。やつは何をしようとしている？)

(ウソ…)

(どうした？)

(アイツ、心が無い。いや、あるにはあるけど、感じ取れないくらいに薄い。何とかわかるのは僕らへの敵意くらい。まるで本当に機械みたい)

(マジで？)

(マジ)

(冗談だろ…)

味方だと伝えられてたマシーナリー機械人形が自分達に敵意をもっていて、しかもまるで機械みたいに感情がないという。

(どういうことだよ、これは)

恒藤は悩むが時間がない。マシーナリー機械人形は敵意をあひむ表しているのだ。何もしなかったらやられる。

「とりあえず、ぶっ潰す！」

恒藤はそう宣戦布告し、ソフトボールのピッチャーのように右腕を下からすくい上げた。

すると、マシーナリー地面から津波のように炎の壁が現れ、マシーナリー機械人形に襲いかかった。マシーナリー機械人形が炎の津波に飲まれる。

「やったか！」

炎が消えたとき、そこに立っている者はいなかった。

しかし、倒れている者もいなかった。

「わっ!?!」

恒藤の後ろにいた黛が悲鳴を上げた。

恒藤が振り向くと黛の後ろに機械人形マーシナリーがいて、黛の右肩に触れていた。

(あの炎の壁を飛び越えたのか?)

恒藤がそう思ったのと同時に、
ピキッ

という微かに何か折れるような音がした。

「うわああああああああああああああああ!!!」

すると黛が転倒し、右肩を抑えて叫び出した。見たところ、黛に傷はない。おそらく、何かの能力だ。

「てめえ!」

親友をやられ、恒藤は怒り、叫んだ。

恒藤は手を横に振った。その手の先の軌跡に沿って、赤く煌めく炎の刃やいばが出現した。それは黛に当たらない軌道で、機械人形マーシナリーに恐るべきスピードで飛んで行った。

しかし機械人形マーシナリーは、その刃を軽々と跳躍して避けた。

恒藤は空中の機械人形マーシナリーに向かって火の球を乱射する。

機械人形マーシナリーは壁を蹴って、わずかに方向修正するだけでそれらを避けてしまった。

機械人形マーシナリーは空中から壁を蹴って、燕つばめのように恒藤のほうに飛んできた。

恒藤が何か反応する前に機械人形マーシナリーは恒藤の横を飛び過ぎていき、飛び過ぎる際に恒藤の肩に触れて行った。

ビキリ

そんな音とともに、恒藤の肩に激痛が走った。

「がああああああああああああああああああ!!!」

「.....」

機械人形は終始無言だった。

九、とある少年の願い

(そろそろ…帰らないと…な)

和井内春人はそう思い、自らの学生寮に向かうことにした。

夜の帳はすっかり下りて、あたりはかなり暗くなっている。とはいっても、街の中なので人口の光があるから、暗くなるのにも限度があるが。

遠くの大きな鉄橋を見るとなんだか光っていた。その光は電光のようだったが、あの鉄橋はライトアップもされていない無骨な鉄橋だったはずだ。何かあったのだろうか？

和井内は普段こんな時間まで外をうろつかない。やはり、明日から夏休みだから気分がハイになっていたのだろうか。

(はしやぎ…すぎた…な)

標準的な高校生と比べると全然はしゃいでいる様子ではない和井内だが、本人にとっては今日はかなりはしゃいだほうである。

(早く…帰ろ…う)

そんなことを考えながら学生寮への道を急ぐ和井内だったが、道の向こうから見覚えのある顔が歩いてきた。

「おや、君は…」

「会長…こんばん…は」

和井内が通学している、とある高校の生徒会長、百地千風だった。なぜか、髑髏のTシャツにとどこどこ破れたジーパンといった不良のような格好をしている。その服装とまさに大和撫子といふべきな、流れるような長い黒髪はアンバランスで、それが妙な色香を放っていた。

「わが校の一年生、和井内春人君だね」

和井内は薄く驚いた。現在、和井内は学生服を着ている。だから、千風の学校の生徒だということはばれると思っていたが、自分の名前までばれるとは和井内は予想してなかった。

「なんで…名前を…知ってるんです…か？」

和井内がそう聞くと、

「当たり前だ。生徒会長たるもの、自分の学校の生徒の顔と名前くらい覚えておかなければな」

そんな堂々とした返事が返ってきた。

「どうやらこの生徒会長、かなり頑張っている人のようだ。和井内は薄く尊敬を覚える。」

「それより君だ。何故こんな遅くに外を出歩いている。しかも、学生服のまま。完全下校時刻はとっくの昔に過ぎているぞ」

「明日から…夏休み…なので…少し…はしゃぎすぎました。以後…気をつけま…す。ところで…会長は…そんな格好で…どうしたんです…か」

「ああ、この格好か。これは風紀委員として『レベル0狩り』を捕まえるために^{おとり}囮捜査をしていたのだよ。本当は『学外』の治安維持活動は警備員の仕事なのだが、今回だけ特別に許してもらった。君もこんな時間に外を歩いていたらやつらに狩られてしまうぞ」

「はは…気をつけます…けど…俺も…一応レベル2の…『^{ショックアップソーバ}衝撃拡散』で…す。安心…して下さい…い」

『^{ショックアップソーバ}衝撃拡散』

防護系の能力の一つで、受けた運動量を散らして衝撃を軽減する能力である。

（『^{ショックアップソーバ}衝撃拡散』か…。それなら襲われても…）

と千風は思ったが

「いや、駄目だ。そういう油断が事故を生む。今後、夜遅くに散歩かないように。私も気をつける」

と言い、『では、おやすみ』と言って、帰って行ってしまった。

「今後…夜遊び…禁止…か」

別にそれくらい、和井内にとって苦でも何でもなかった。夜の街には刺激的なものが多くあるが、和井内を満足させることはできなかった。

和井内にとつて、カラオケはただ歌うだけ、ファッションはただ着るだけ、喧嘩けんかはただ殴るだけなのである。

では、何が楽しいのかと問われると、和井内は答えられなかった。感情の薄い自分が何を楽しめるのか、それが和井内にはわからなかった。

和井内は感情を薄くしているソレを突き破るほどの何かをいつも求めていた。ときどき、その何かを見つけたが、いつの間にかどこかに失くしてしまう。

(雷：みたいな…すごい…衝撃が…落ちて…こないか…な)

和井内がそんな風に願ってみると、空がゴロゴロと鳴りだした。

「？」

和井内が何事かと思い、上空を見上げると、黒い夜空はさらに黒い雷雲らいうんで覆われてた。和井内の記憶が正しければさっきまではそんなに悪い天気ではなかったはずだ。しかし、空には今にも雷を落としそうな雷雲が…

ピイツツツツシャアアアアアン！！！！

すさまじい音を立てて雷がああ大きな鉄橋に落ちた。和井内にはなぜか、その雷鳴が中学生くらいの少女の雄叫びに聞こえた。

この急激な天候の変化は超能力だろうか。

これほどの力はレベル5くらいしか持つていないはずである。

あの鉄橋で常盤台とぎわたいの超電磁砲レールガンが化け物でも相手に戦闘していたのだろうか。

事の真偽を知る由もない和井内はこう思った。

(今度から…変なことを…願うのはやめよ…う)

十、願いの代償

「タイム…セール…今日の…十一時…から…カップ…ラーメン…半が…く」

七月二十日、夏休み初日。学園都市の、とある学生寮の一室。

昨日の夜に落ちた雷の影響で、和井内春人の部屋では、エアコン含むほとんどの電化製品が駄目になった。じりじりと水分と体力を徴税する、暴君のごとき熱気から少しでも逃れるために和井内は団扇で自らをあおぎながら、近所のスーパーのチラシを見てそう言った。「買いだ…な」

いつも無表情なはずの和井内の瞳が獲物を狙う獣のように、きりと光った気がした。

七月十九日の夜、ひよんなことから和井内は「雷みたいなものが落ちてくればいいのに」とか願ってしまったら、本当に落ちてきてしまった。実はその落雷は、どこかの学園都市の第三位が「どこかの不幸な高校生」に一方的に戦いを挑んで勝手に自爆した結果なのだが、そんなことを知らない和井内は「自分がなんか引き寄せちゃったかな」なんて思っただけで薄く反省していた。

しかし、自分の部屋に帰ってきてみると、冷蔵庫含むほとんどの電気製品が壊れていた。

不幸中の幸い、コンロは無事だったため、全滅確定の冷蔵庫の中身を料理して、少しでも多く体内に収納したのだが、さすがに限界が来て『死…ぬ』と本気で咳きながら意識を失ったりした。

そして現在、起きた時にはすでに悪臭を放って滅亡していた冷蔵庫の中身を生ゴミ用ゴミ箱というお墓に葬ってやっってから、和井内は近所のスーパーのチラシをチェックしている。

和井内の予想によると、昨日の雷は本当に半端なかつたので他のと

ころでも自分のところと同じ悲劇が起きている。だから、この半額のカップラーメンのような非常食の価値は必然的に上がってくる。よって、このタイムセールは激戦になることぐらいは誰でも予測できる。

ちなみに、和井内は今日からある『夏休みの補習』に呼ばれなかったが、『夏休みの補習』に呼ばれたことにより不幸にもこのタイムセールを逃してしまった『とある同級生』がいることを和井内は知らない。

(生き残…る)

和井内は決意を新たにして、戦場へと向かう。

まだ十一時には早いですが、早めに戦場に乗り込んでおいて損はない。

和井内が戦場に向かうため、自らの学生寮を下の階へ降りていると、ドラム缶みたいな形の清掃ロボットが和井内を追い越して行った。

さらにそれを追って、一人の少女が和井内を追い越して行った。

外国人らしく、肌は純白で緑色の瞳、髪は腰まで届く長い銀髪。それだけでも特徴的だったが、それよりも和井内が不思議に思ったのは「何…だ？あの…服…は」

少女の着ていた服は『純白』で、要所要所に金糸の刺繍が織り込まれている長いワンピースだった。

なぜか『修道服』に見えた気がするが、和井内のイメージでは『修道服』は『純白』ではなく『漆黑』だし、頭に被るフードがなかった。とはいっても、和井内は『修道服』に関して詳しいわけではない。もしかすると、フードがない修道服もあるかもしれないし、色も『漆黑』に限られているわけではないかもしれない。

だから、和井内が不思議に思ったのはそこではなかった。少女の服は安全ピンまみれだった。よく見れば、布地を安全ピンで止めただけのパンクな服装で

「針のむし…る？」

が率直な感想だった。

少女はそのまま、清掃ロボットを追いかけていき、見えなくなっ
た。

表現は個人の自由なので、和井内はそれ以上、その少女の服装に
ついては考えないことにして、学生寮の外に出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7514h/>

とある科学の機械人形（マーシナリー）

2010年10月8日23時41分発行